

君はどこを目指すのか？

東京世界陸上が終わった。

ギリシャ彫刻のような肉体が、人類の能力の極限に挑む姿は、観ているだけでワクワクする。加えて彼らアスリートの戦いが終わった後のコメントには、しばしば心を揺さぶられる。

「何が足りなかったんだろう。」「何がいままで間違っていたんだろう」百十郎ハードルで百分の6秒差でメダルを逃し、5位になった村竹ラシッド選手。彼は悲痛な声を絞り出し、こつ言つて慟哭した。

世界5位つて凄いいじゃないと思うのだが、メダルを目指した彼にとって5位は紛れもない敗退であり、その原因を慟哭しながらも自問する。そして彼はこつも言つた。「何年かかっても、この脚が許す限りメダルを獲りたいと思います。」あくまでも高みを目指すその姿に、不覚にも涙腺が緩む。

過日、市内の学校の先生と懇談した。話が学力に及び、先生は「我が校は全科目、県

の平均を上回っている」と仰った。

過疎地などに比べれば、はるかに教育環境の整った松江市の学校が、県平均を上回るのは当たり前と言っている。近年島根県の子供たちの学力は全国平均を大きく下回る。市内の学校の生徒の学力を評価する際、比べるべきは県平均ではなく全国平均ではないのか。

ほどほどの目標設定は決して悪いことではない。その場合、容易に達成感を得られるが、そこに安住することなく、次の高みに向かう姿勢が必要だろう。

子ども達には目標を高く持つてもらいたい。しかし、目標が高ければ高いほど、夢破れる機会は多くなるだろう。たとえそうなくても、さらにチャレンジする勇氣を持ってもらいたい。村竹選手の言葉は多くのことを教えてくれた。